

『イタリア伯爵 糸の町を往く』明治2年の上州視察旅日記』

●著者…富澤秀機

●発行…上毛新聞社

明治維新（1868年）が実現したとはいえ、廃藩置県が断行されて中央集権体制が整い、真の意味での諸改革が進んだのは、明治5、6年である。学制公布、徴兵令、地租改正が矢継ぎ早に実施され、新橋・横浜間に初の鉄道が敷かれ、



官営富岡製糸場も建設されて、世界一の生糸輸出国（1909年）のへ向けて殖産体制も整った。それに先立つ明治2年、日本近代

化の夜明け前とも言える時期に、ドウラ・トウル駐日初代公使（伯爵）に率いられたイタリア人7人が、北関東の養蚕地帯を視察するため、馬に跨って中山道を北へ向かった。横浜を出てから5日目に、ようやく前橋に辿り着いた一行を出迎えたのは、前橋藩17万石のサムライ80人で、宿舎となった本陣には、急拵えの西洋式ベッドや椅子も準備されていた。

幕末から明治初期にかけて、横浜在任の外国人は半径10里（40km）を越えて移動することを禁じられていた。異国、異人とは、これすなわち排斥すべきものだ、と頑迷に信じ込んでいた輩がまだ多くいたから、関東地方の奥深くまで内陸旅行を許されたのは、これが初めてのケースだった。沿道の人々にとっても、

欧州人を目にするのは恐らく有史以来初めてだったに違いない。ロングスカート姿の伯爵夫人が参加していたこともあり、どこに行っても人々の好奇心が集中し、黒山

の群集に取り囲まれた。

一行は「総ての階級の人々の温かな性格、上品な物腰、思いやりは日本人の特徴だ」との印象を受けると共に、各地で示された「おもてなし」に感謝している。

到着の翌日には、町内の生糸工場を熱心に視察して回った。伯爵らは零細家内工業ながら、良質な生糸を生産している様子に感嘆しつつも、輸出によつて多くの外貨を稼ぐためには、器械製糸導入による大量生産が不可欠だと実感した。

それも影響したのだろうか。翌明治3年、前橋藩はスイス人技師C・ミューラーを雇い入れ、町内の細ヶ沢に小規模な藩営前橋製糸所を設立した。2本の軸に6個ずつの糸枠がつくイタリア式の双糸機械で、これが日本最初の器械製糸場である。

日本政府も当時の最大の輸出品であった生糸の大量生産によつて、富国強兵の実現を目指し、2年後の明治5年、富岡に官営製糸場を建設。販路が米国に拡大されたこともあって、生糸は我が国輸出総額の6、70%を占め、昭和7年には最高を記録した。後に「軍艦を購入せんと欲せば多く生糸を産出すべし」

（松方正義蔵相）と言われたごとく、生糸は生産量の実に84%を輸出し、世界市場に占める割合は70%に達したのである。

ところで、2泊3日の前橋滞在を終えた伯爵らは、伊香保温泉で3日間馬を休ませた後、高崎藩（8万石）へ。さらに秩父を山越えて無事21日間の旅を終えた。

この視察旅行に際して記録係を任されたのが、ピエトロ・サヴィオである。彼が残した記録には、毎日の行程を追つて各地の養蚕事情が詳しく記述されている他、当時の日本人の生活状況、各地の産物等が記述され、翌年の1870年にミラノで刊行された。

本書はサヴィオの記録を基に、伯爵らがどんな行動を取ったのか、何に関心を寄せたのか、また、初めて見る西洋人を出迎えた日本人の驚きや歓迎ぶり、当時の日本がどんな様子だったか、などを行程に沿って記述。

一行の視察が翌3年の前橋藩による日本最初の器械製糸所設置のインセンティブとなり、さらに同5年の政府による富岡製糸場の開設へと広がっていった経緯を明らかにしている。